

たわわ

AUTUMN
No.84

「たわわ」というタイトルには「小さな情報がたくさん集まって多くの実を結ぶように」
という期待が込められています。

演劇は 観るのも やるのも面白い! 湘南ひらつか市民演劇フェスティバル 11年の歩み



心のこもった言葉は必ず届く

湘南ひらつか市民演劇フェスティバル実行委員長
劇団きさく座代表
高橋 行恵さん

表現者の力量は、どんなに着飾ったとしても最後は人間としての力しかありません。人に何かを伝える力を身につけるには自分自身を磨くしかない。これは誰にとっても永遠のテーマではないでしょうか。

劇団きさく座は、1997年に開講された財団法人平塚市文化財団主催の「ワークショップ演劇」の受講生有志によって結成されました。同年8月に受講生全員で『木の咲くとき』（作：坂本真貴乃、演出：渾太防一枝）を平塚市民センターで上演しています。きさく座という名称は、この初演の作品名から、またきさくに芝居をという気持ちも込めて付けたものです。

年に1~4回のペースで平塚を中心に横浜、静岡等で既成及びオリジナル作品を上演してきました。

平塚は横浜から東海道線で下りに乗って約40分、湘南の地にあります。七夕が有名ですが、サッカーのベルマーレや箱根駅伝の中継所、あるいは平塚競輪などにより、文化系というより体育会系の街というイメージが強いかもしれません。

平塚における公演の場となるのは、平塚市民センター大ホール（1,400席）、中央公民館大ホール（700席）の2つです。大きな会場なので使用料だけでも私たちにとっては高額で、当時は高いハードルっていましたが、文化財団に協力を要請し、周辺のアマチュア劇団に呼びかけて、2002年8月、中央公民館で第1回目の市民演劇フェスティバルを開催できることになりました。



『しんしゃく源氏物語』
(2002年8月 第1回市民演劇フェスティバル)

その時の出演は私たち「劇団きさく座」と「劇団カレーライス」「シアター詩貴舞」の3団体でした。「夢を語ると何かが動き出す」のを実感したのです。

この市民演劇フェスティバルによって平塚が「演劇の街」になれたとまでは言いませんが、少なくとも変化はあったと自負しています。平塚でアマチュア劇団の舞台を見る機会が増えたことは間違いないません。秋のフェスティバルを慣例の行事として毎年来て下さるお客様も見かけるようになりました。目当てにし



『ハナ・サケ・明日』
(2011年9月 第10回市民演劇フェスティバル)

てきた劇団以外の舞台も観ることができるので、思わぬ収穫があるかもしれません。年末年始には地元ケーブルテレビで全作品を放映するため、偶然テレビで見たという方から感想をいたくこともあります。

お客様だけではなく、演劇フェスティバルを発表の場として新しく参加する団体も増えてきました。自主公演をするのに比べ会場費、宣伝費などの負担が軽くて済み、集客もある程度見込めますから、劇団の存在自体を知てもらうにもいい機会になっています。3回目からは平塚市の大学交流事業にもなり、東海大学、神奈川大学の演劇サークルも参加するようになりました。



『キネマの天地』
(2012年6月 きさく座第30回（15周年）公演)

今まで11回続けてきた中で全回参加はきさく座だけで、まだ1回だけという団体もあります。芝居を続けるということは、稽古や運営など様々な難しさがついてきます。都合のついた時に芝居を創って観てもらおう、そういう芝居へのかかわり方があってもいいのではないでしょうか。とにかく芝居好きが発表の場を平塚で確保できたということが、演劇フェスティバルの一番の成果でしょう。

「役者は見られてうまくなる」と言いますが、市民劇団であるわがきさく座も、お客様に愛されて成長してきたと思います。

でも一番大切なことは、やりたいという情熱があれば何ができるということ。数とか物とか目に見えることではなく、どれだけ一生懸命なのかという気持ちが大切だと思います。とにかく目の前のことに一生懸命になって、前向きに進むことにします。すべてが肥やしとなって、花開く時を信じて。



PROFILE

湘南ひらつか市民演劇フェスティバル実行委員長
劇団きさく座代表
高橋行恵（たかはしゆきえ）さん

横浜生まれ。中学、高校と演劇部で活動し、舞台に立つ楽しさを知り東京舞台芸術学院に進む。結婚、育児、仕事とブランクはあったが、15年前に仲間ときさく座を結成。2012年までに平塚を中心に31回の公演を行っている。

能の魅力・楽しみ 2

第4回『湘南ひらつか能狂言』が12月16日(日)に平塚市中央公民館の大ホールで開催されます。能の魅力・楽しみを実感するには、視覚に飛び込むきらびやかさ、聴覚が捉える気迫、情感等による視点から近づく方法がありますが、その基本となるのは能のあらすじを大まかにでも知っておくことだと思います。今回上演する『七騎落』のあらすじを御説明します。

湘南ひらつか能狂言実行委員長
平塚謡曲連合会長

石川 幹夫さん

源頼朝が伊豆で旗揚げ(軍を起こすこと)はしたものの、石橋山の合戦に敗れ、湯河原の山中を追手から逃れます。『七騎落』は、頼朝一行が再起を期し真鶴の浜から房総半島の安房に逃れる時の話です。

頼朝(ツレ)は一行の軍師格である土肥実平(シテ)に船の用意を命じ、いざ漕ぎ出そうとします。船中を見ると、主従合わせて八人いました。頼朝は祖父為義が九州へ落ちた時も父義朝が近江へ敗走した時も八騎であったことを思い出し、不吉な数なので一人降ろすよう命じます。選びあぐんだ末、最長老の岡崎義実(ツレ)を降ろそうとしましたが、義実は諭破します。「親子は一体で二つの命を持っているが自分は先の石橋山の合戦で息子真田の与一義忠を打たれてしまった。土肥親子こそ二つの命を持っているのだから、どちらか一方が降りるように」と。

実平は息子遠平(子方)に降りよと命じたものの、遠平は君(頼朝)のため働きたいから降りないと拒みます。父の命に従わぬならば手討にしようとしますが、義実に再起を期す前に心得違いをするなどたしなめられ、やむなく実平自ら降りようとします。すると父の困った姿に遠平が降りると申し出たのです。さすがは我が子と誇りに思いつつも、陸には敵が大勢おり、もはや討死するのみです。一行は親子の別れに同情しつつも、船を沖に進めます。遠ざかる陸をながめひそかに悲しむ実平の様子は哀れ極まりないものでした。



成願寺内にある「七騎堂」
内部には能「七騎落」に登場する七人の像がある

沖合で和田義盛(ワキ)が頼朝の船を探し出し、声をかけてきます。実平は義盛の心をためすため、主君はいないと偽ります。すると義盛は甲斐なきことと切腹しようとするので、君を手助けする心に偽り無いものと確認し、切腹を止めさせます。近くの浜辺に船を寄せ、義盛は頼朝に対面を求めました。義盛は実平に向かい、遠平は自分が助けたと引き合せます。実平は夢かとばかり喜び父子は抱き合い感涙に咽ぶのでした。一行は酒宴を催し、実平は喜びの舞をまい、それはやがて到来する天下平定を祝っているようでした。

舞台を鑑賞するポイントとしては、全体に心理のゆれや掛け引きが中心に表現され、物語が進行していくところです。それは武士(もののふ)としての忠義や親子の情愛がテーマとなっています。それぞれの場面の緊迫感や情感を味わっていただきたいと思います。

日本の歴史を大きく変換することとなった武家社会の成立に、平塚を含む相模のもののふたちの活躍があった歴史を思い起こし、更に郷土に愛着を感じる契機となれば幸いです。平塚近郊では



天徳寺門前にある与一を祀る
『眞誠殿』

土屋の大乗院(土屋三郎宗遠)、真田の天徳寺(真田与一)、岡崎の無量寺(岡崎義実)等にて往時が偲ばれます。この上演が平塚市制80周年を祝うにふさわしいものになるよう皆様のご来場をお待ち申し上げます。

「ことば」を使って 「こころ」をつなぐ



タガログ語通訳 鈴木ジョセフィーヌさん

外国籍市民の方もたくさん暮らす平塚。様々な文化のルーツを持った方たちが地域で活躍しています。今回はタガログ語通訳の鈴木ジョセフィーヌさんを紹介します。

25年前に、日本人の夫と結婚してフィリピンのマニラ市から平塚へやってきました。日本語は、来日してから日本語教室へ通つたり、自分で勉強をしたりして何年もかけて習得しました。

今はほぼ毎日、通訳・翻訳の仕事をしています。平塚市と伊勢原市の学校から依頼を受けて、タガログ語を母国語とする生徒や保護者のサポートをしています。また、医療通訳といって、神奈川県が運営している通訳者派遣制度で病院での通訳もしてい

ます。医療通訳では難しい単語も多く、責任も重いのでとても気を遣います。

通訳は、言葉を正しく伝えればいいだけではありません。言葉がわからない人はそれだけで社会的に色々な問題を抱えていることが多いのです。語学力だけでなく人としてのマナーがとても重要になってきます。相手が不安に思っていることを受け止めて寄り添う必要があります。学校でサポートした親子が、その後日本語を身につけて立派に日本で生活していかれるようになると、とても嬉しいですね。通訳がきっかけで、身内のようにつきあいが続いている人もたくさんいます。私は常々、この活動は自分の勉強のためにさせてもらっていると考えています。特に翻訳は、とても時間がかかるて大変ですが、それを必要としている人の顔が見えるので、がんばれるのです。

タガログ語通訳ができる人は今とても少ないので、もっと増えたら素晴らしいと思います。日本は皆とてもマナーがよくて素晴らしいところ。私はこの活動を通じて、日本のコミュニティとのつながりだけでなく、他の外国籍の市民の方との交流もとても広がりました。通訳は伝える相手がいるからこそ喜びも大きいのです。

『史跡の風景』 第3回

相模の名城 岡崎城



南側の沖積地より岡崎城を望む

丹沢山麓から南へ伸びる伊勢原台地の南端に岡崎城があります。台地の中央に平塚市と伊勢原市の市境が通り、伊勢原市域の無量寺境内が本丸跡と伝えられています。平塚の沖積低地を見下ろす位置にある岡崎城は、南側に広がる低地の開発及び管理の拠点として好適の地であるとともに、相模湾岸や丹沢山麓に沿う東西方向、相模川に沿う南北方向それぞれの交通路に対する影響力を行使できる位置であり、相模国全域を視野に置いた場合、極めて重要な地点と言えます。

「岡崎」の名は平安時代の末期、治承四年(1180)に源頼朝が伊豆で挙兵する際に従った者の中に見える「岡崎四郎義実」の名として歴史に登場します。義実は相模國の大豪族三浦氏の一族で、相模國中央部での開発を進めるべく岡崎の地に住み、その地名を名字としました。一般には岡崎城の築城者と伝えられますが、現在想定されている壮大な岡崎城は室町時代の姿であり、義実時代の岡崎城は岡崎神社を中心とする南部の一帯と考えられています。義実は鎌倉幕府の創建に大きく貢献し幕府の重鎮として遇されますが、その実権は北条氏に握られてしまいます。伝承される彼の墓は岡崎城域に深く切れ込んだ谷の奥に静かにたたずんでいます。



岡崎義実の像(岡崎公民館前)



伝) 岡崎義実の墓

室町時代の中頃になり岡崎城に再び歴史の光があたります。応永二十三年(1416)に上杉禅秀の乱で駿河守護今川範政の率いる討伐軍が攻め落とした西相模の拠点の中に「岡崎」が登場するのです。この戦乱の結果、西相模は大森氏に与えられました。現在、台地の南東の一画にある紫雲寺は山号を「大森山」と言い「大森寄栖庵氏頼公居館跡」と伝えられています。その後、三浦氏が再び相模國の中央部に進出して岡崎城を手に入れます。岡崎城が現在の無量寺を中心とする城郭に整備され拡大していくのは、周辺が戦乱に見舞われたこの時期と考えられます。

そして永正九年(1512)、伊豆国に続いて相模國の制圧を目指む伊勢宗瑞(北条早雲)が岡崎城を攻撃します。対する守将は三浦氏を受け継ぐ名将三浦義同入道道寸でしたが、力及ばず落城し本拠地の三浦半島へ落ち延びて行きました。

この合戦を境に平塚市域は伊勢宗瑞の勢力下に入り、小田原北条氏を主役とする関東の戦国時代が幕を開けます。岡崎城は最前線の城砦としての役割を終えますが、近世の合戦図や国絵図では「古城」として表現されています。歴史の扉を開いた相模の名城は、相模國のランドマークとして長く人々の記憶に生き続けたのです。

(平塚市博物館学芸員)



市境に重なる岡崎城の堀跡
(右側が伊勢原市無量寺境内、左側は平塚市)



大森山紫雲寺

平塚市文化振興基金に御協力を

平塚市文化振興基金は、市民文化の振興を図るために活かされます。基金に御寄附くださる方は、平塚市文化・交流課まで御一報ください。御支援をよろしくお願いいたします。

(電話 0463-32-2235)

基金はこんなところに役立てられています(23年度実績)

- 木谷實・星のプラザに新しい収蔵品を展示しました。
- 平塚市が長年取り組んできた子ども囲碁教室に、プロ棋士が指導する上級教室を開設しました。
- 市内の小学校2校をプロの音楽家が訪問し、生徒たちが生演奏を鑑賞しました。
- (公財) 平塚市文化スポーツまちづくり振興財団が行う文化事業の一部に活用されました。



平塚市文化・交流課

〒254-0045 平塚市見附町 15-1 平塚市民センター内 電話 0463-32-2235 FAX 0463-31-6466

平成24年(2012年)11月15日発行 e-mail bunkoh@city.hiratsuka.kanagawa.jp ホームページhttp://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/bunka/index.htm

再生紙を使用しています